

【一般口演7】 第23席

『医学天正記』の中の鍼灸

京都 高島 文一

『医学天正記』は、日本医学中興の祖である曲直瀬道三の業績をついだ二代目道三である曲直瀬玄朔が、天正四年（1576）から慶長十一年（1606）までの30年間の症例の中から345症例を選んで、46の病類に分けて、診療年月日、姓名身分、年齢、症狂、担当医師、診断名、治療法、経過を述べたものである。当時は金元明の医学が貿易の進展により我が国に流入し、新しい治療法が開発された時期である。玄朔の診療した患者は、天皇家をはじめ当時の上流階級とそれに直属した階層であるので、一般庶民とは様子が異なると思われるが、大体の方向を窺うことができる施鍼についての記載は見当たらなかった。

御園意斉が1570年頃、松永久秀を頼って摂津より上京し正親町天皇の侍医となり、金鍼、銀鍼をつくり診療を行ったという記録があるが、急病の場合は治療に参加できなかったが、回復期のみ鍼灸が行われたが、それが記録として残らなかったのではないかと思われる。

灸については、後陽成天皇、28才、1598年9月1日（この年8月19日に秀吉死去）、眩暈、脈沈細。10月12日、脈結滯、食不消、胸膈之間脚氣鬱滯。10月26日、嘔吐半減。そこで膏肓に灸したいと五撰家に伺いを立てた所、九条、二条、近衛殿は旧記にないが医師が良いというなれば施灸すればよからうとの返事、一条鷹司殿は旧記がないからしてはいけないと返事、依って灸は諦めた。

1604年、後陽成天皇、腹部臍下左傍に癰腫を患われた。この頃、中院入道の也足軒が足利旧記に施灸のことが書かれているのを発見し、その旨を奏上したので、腫上に灸することができた、という記載がある。